

## 日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築

八木真奈美 大阪大学大学院博士後期課程  
Manami Yagi Graduate School of Letters, Osaka University

### 要約

日本に滞在する「定住外国人」は平成14年度で日本の総人口の1.4%を占めるまでになり、それに伴う日本語学習者の増加と多様化が言われて久しい。「留学生」や「就学生」は特定の日本語教育機関で日本語を学ぶことになるが、「日本人配偶者」や「定住者」などの多くは、いわゆる地域の日本語教室で学ぶ、あるいは生活の中で学ぶというのが現状である。そこで、学習者が日本語を使って生活しているネットワークが注目されるようになったが、従来の研究は教師側の視点で学習や習得に焦点をあてるが多かった。本研究では学習者側の意味付けを明らかにするために日本人配偶者となった韓国女性に協力を依頼し、彼女のネットワークとアイデンティティの関係を分析した。データから、協力者とその夫には社会的に不公平な力関係が存在し、協力者は家庭での日本語使用に困難を感じていたが、一方家庭以外のネットワークでは、自分自身を表し冗談を言うことができた。彼女にとって第二言語を使うことは、彼女が参加したいコミュニティや個人との関係の中で自分の居場所を獲得し、他者とのインターアクションを通して「自分」を表現していくことなのではないかと考えられた。

### キーワード

ネットワーク, アイデンティティ, 日本人の配偶者

### Title

**A Japanese Language Learner's Organization of Networks and Construction of Identity in Japanese Society.**

### Abstract

Foreigners living in Japan have risen to account for 1.4% of the population. In recent years, researchers have seen an increasingly large and diverse number of Japanese language learners. While foreign exchange students learn Japanese in a particular institution, the majority of foreigners who are spouses of Japanese citizens or inhabitants in some other capacity often learn Japanese through local government language programs or acquire Japanese naturally in everyday life. Some research has been done on how foreigners use Japanese in their personal networks, but this has typically been done solely from the point of view of language instructors. Therefore, to further explore this issue from the learner's point of view, this study focused on the experiences of a Korean woman married to a Japanese man and analyzed the relationships between her networks and her identity. The data suggest that there exists social inequality between her and her husband, and although she often feels uneasy at home, she can be herself and even make jokes with others through her use of Japanese in other personal networks outside the home. It was concluded that, for her, using a second language is a way of securing a place in the communities with which she aspires to participate, and it is a way of expressing her "self" through interaction with others.

### Key words

networks, identity, spouses of Japanese

## 1 本研究の背景

近年日本に住む「外国人」数の増加に伴い、日本語学習者の増加とその多様化が言われて久しい(たとえば田中・斉藤 1993)。法務省の統計によると平成 14 年 6 月のまとめでは「外国人登録者数」は 177 万人で 33 年間連続して増加しており、既に日本の総人口の 1.4% を占めている。在留資格別に数の多い順から見ると、日本人の配偶者、定住者<sup>1</sup>、留学、家族滞在、興行、就学、研修と非永住者の構成比が年々上昇してその多様化も進んでいる。

このような日本語学習者の増加と多様化を受けて、日本語教育学会では 3 年にわたって「国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究」を行った。その中で J.V. ネウストプニー (1997) はネットワークへの関心の高まりについて以下のように述べている。「近代化が終わるまでの言語教育への参加者はタイプが限られており、主なものは教師と学習者だけであった。これに対して、ポスト近代的な言語教育は、社会からの需要の影響を受け、(中略)参加者の類型が多くなり、その結果この参加者の配列としてのネットワークが目立つようになった。」

つまり日本語教育について何か述べる時、以前は留学生や就学生の教室での日本語を対象としていたが、近年の学習者の多様化を受け、今では隣の家に住む日本語を母語としない A さんの日本語も重要な日本語教育の対象となっているということである。そしてその際生活者である A さんが特定の日本語教育機関に所属していない場合も当然想定され、たとえば、独学、コミュニティで学ぶ、あるいは積極的には学習していないなど、個人によってさまざまな場合が考えられる。したがって以前のように学習者が日本語の語彙や文法などの知識をためて、それを応用して使うという教育の捉え方だけでは、もはや A さんの学習の展開を捉えることができなくなってきたと言えるだろう。そこで、特定の教育機関には所属しない学習者が実際の生活の中で、どのような関係(ネットワーク)の広がりを持ち、その中でどのように日本語を使っているのかを丁寧に記述していく必要があるという考えに至った。

日本語教育においてネットワーク研究と題しているものは、学習者の生活全体を広く「学習環境」として焦点をあてているものを含めても、あまり多くない(日本語教育学会, 1997; 内海・吉野, 1998; 浜田, 2000)。しかも、これらの先行研究は一部に参与観察法によるものがあるが、多くが対面インタビューやアンケートなどの調査方法を用いて、主にネットワークや「学習環境」が日本語学習やその習得に及ぼす影響について調査したものであり、やはりその視点は教師側にあると言わざるを得ない。本研究は、調査方法にエスノグラフィーという手法を用いることによって、学習者自身の意味付けを明らかにしたという点で、先行研究と大きく異なる。また調査の過程においても、調査者は観察するだけではなく、協力者の生活というフィールドに許される範囲で参加し、データが語るものを忠実に抽出した。その結果、協力者の第二言語生活は、発音や文法などコードとしての言語のフォームの習得に焦点をあてたアプローチだけでは十分に説明することができないということがわかった。第二言語教育研究では、学習者を知識を蓄える容器として、またインプットをアウトプットに変換するコンピューター装置として捉えてきた。しかし 1970 年代以降、伝統的な習得メタファーとは異なるアプローチの模索が始まり、学習者を社会とは無縁の個人ではなく、むしろ社会的関係の中にもうめこまれた存在と捉え、話者の地位や社会的文脈に、より注意を向けるべきであるという主張がされ始めた(Kramersch, 2002; Norton, 1995, 2000; Pavlenko & Lantolf, 2000; Lantolf & Pavlenko, 2001; Pavlenko & Piller, 2001; Toohey, 2000)。本研究は協力者の社会的関係をネットワークという枠組みで捉え、その中で日本語を使って生活する協力者の「闘争」(Norton, 2000)を描く試みであったと言える。

そしてこのような研究を進めることによって、多くの第二言語話者を受け入れている日本という社会は何をすればいいのか、そしてその時、日本語教師にできることは何なのかを再考する一材料を提供できるのではないかと考える。

## 2 調査

### 2-1 調査方法

調査方法はエスノグラフィー<sup>ii</sup>を援用した。文化人類学に起源をもつエスノグラフィーは、今日では社会学、心理学、教育学などさまざまな分野にその広がりを見せている。Van Maanen (1999) はエスノグラフィーとは「ある一つの文化の（あるいはある一つの文化から選択された諸相の）記述による再現である。」と述べている。ここでいう文化とはゆるやかで掴まえにくい曖昧な概念であると前置きしながらも、「ある一定の集団のメンバーが多少とも共有していると思われる知識を指し示すもの」としている。そして、一つの文化はその成員の行動や言葉によって表現され、それをフィールドワーカーが「聞くこと」「見ること」によって理解し、それを再現し、表現しようとする行為を通して見えるようになるものだと主張している。Van Maanen (1999) は法学、医学、経営、社会心理学など、「今日のエスノグラフィー」(Van Maanen, 1999) の分野を多数あげているが、エスノグラフィーが文化の再現であるという主張は、異文化社会に入りその体系的なシステムを記述する文化人類学と、その手法を都市というフィールドに取り入れ、その社会構造を解き明かそうとする社会学におけるエスノグラフィーを主に念頭においていると考えられる。

一方、箕浦 (1999) は、エスノグラフィーは社会心理学や発達研究、教育社会学の分野においては、そこでの体系的なシステムの記述や、社会構造を解き明かそうというのではなく、「人々の生きている意味世界を、微細なユニット、たとえば、親子間の言葉の掛け合いとか、対面的な日本語教授場面とか、教室での生徒同士のやりとりとか、一人一人の行動や語りなどに着目して読み解く」(箕浦, 1999 : 11) 研究のため、よりミクロな次元に焦点を当てていると述べている。したがってここでは「エスノグラフィーとは、他者の生活世界がどのようなものか、他者がどのような意味世界に生きているかを描くことである。その人たちが世界をどのように見て、何を喜び、どのような行動を

とるのか」(箕浦, 1999 : 2) をその人の文脈ごとと抽出しようとする試みであるとしている。

本研究においては、学習者がこの日本という社会でどのように日本語を使って生活しているのだろうかというリサーチ・クエッションをたて、フィールドに入った。ここでのエスノグラフィーは、箕浦 (1999) の立場をとり、体系的なシステムや社会構造の記述ではなく、調査協力者 M の意味世界、つまり M が第二言語である日本語を使うことをどうみているのか、そしてそれに影響を与える社会的、文化的枠組みは何なのか、それを M の周りの文脈ごとに抽出し、私の解釈を通して明らかにすることであるとと言える。

### 2-2 調査協力者 M

本研究の調査協力者である M は日本人の夫を持つ日本人の配偶者である。1998 年、日本に滞在している弟の影響で日本語に興味を持ち、母国である韓国の日本語学院で日本語の学習を始めた。文法のクラスに 2 か月、会話の初級クラスに約 4 か月、その後 NHK ニュースを聞くクラスに約 1 年在籍した。日本語を始めて半年くらいから日本に留学することを決めていたが、受け入れ許可が出ず待機していた。その間の 1999 年 12 月に現在の夫と知り会い、その後結婚が決まり、留学計画は中止した。そして、2000 年秋に日本人の配偶者として来日し、現在は夫とその母の三人で暮らしている。日本では特に日本語教育機関には所属していないが、2001 年から地域の国際交流センターの主催するボランティア講師による 1 対 1 の作文の授業を週 1 回受けている。

データからわかった調査時点での M のネットワークを以下にあげる。

夫：2000 年 6 月に M と結婚 (M の来日はその年の 10 月)

義母：M の来日以来同居。飲食店を経営しているため、日曜日を除く毎日、昼前には店に出かける。帰宅は深夜になるので、M との接触は平日は午前中の 2、3 時間のみ。遅い朝食を M と共にする。

弟：家族で東京に住んでおり、何度か訪問している。

電話でのやりとりもある。

**学院の後輩**：以前に M が韓国の日本語学院に通っていた時の後輩。東京に住んでいる。現在、どの程度の付き合いがあるかについては M のインタビューからはわからない。電話でのやりとりはある。

**下宿人 P**：2001 年秋から 2002 年 3 月下旬までの約半年間、M の家に下宿していた韓国人就学生。M の韓国の日本語学院の後輩にあたる。韓国では M と面識がなかったが、学院の依頼で下宿させることになった。一人暮らしを始めるため、3 月下旬に M の家から引越した。

**知人 K**：共通の韓国人の知人を通して知り合った。M が二人の通訳となることがしばしばあった。現在は頻繁に会うことはない。

**知人 F**：M の夫が関わっている宗教法人の M の自宅地域の世話役。出会いは F が誘った宗教の集会であったが、その後は集会ではなく、自宅で直接会ったり、電話で話をしたりしている。M の話では「1 か月に 1 回の時もあるし、3 か月会わない時もある」(I020723) iii。

**国際交流センターの日本語講師**：M が通っている国際交流センター主催の日本語教室のボランティアの講師。2001 年 1 月から週 1 回、1 対 1 の作文の授業をしている。

**国際交流センター**：M は同センターの主催する日本語教室で作文の授業を受けている。その他に M が窓口で大学受験について相談をしたり、センターのほうからスピーチコンテストの参加や地域の国際交流イベントへの出席を依頼されたりというつながりがある。

**スイミング教室**：所属しているスポーツクラブのスイミング教室、教室は週 1 回。

### 2-3 データ収集

エスノグラフィーにおけるデータ収集は主に参与観察とインタビューであるが、加えてフィールドで収集した人工物 iv も分析の対象となる。今回の調査は M のネットワーク調査であるから、常にある一定時間 M と行動を共にし、参与観察をするのが適切であろうが、M は妻として家庭にすることが多く、家庭にお邪魔して観察させてほしいと依頼することは無理が

あると思われた。また、調査期間だけとはいえ、調査者が家庭という狭い空間に常にいることは、被調査者やその家族の言動に少なからず影響を与えるのではないということも懸念された。また、調査開始当時は、M との信頼関係がまだできていたとは言えず、M に録音機器を渡してデータを収集してもらおうというのも、M がするであろう家族への配慮や M にかかる負担を考えるとためらわれた。

そこで、調査は M へのインタビューと、M の日本語使用にあたって鍵になるとされる人物へのインタビュー、そして M のインタビュー時の様子などインタビューだけでは拾いきれない情報はフィールドノートを常につけることによって補うという方法をとった。さらに M の韓国での日本語学習ノート、来日後日本語教室で書いた作文、スピーチコンテストの原稿を提供してもらえたことで、データに厚みが増した。データを以下にまとめる。

1. M のインタビュー：40 分×3
2. M のネットワークに登場する人物へのインタビュー：
  - 夫：40 分
  - 義母：30 分
  - 国際交流センターの日本語講師：40 分
  - M の自宅の下宿人 P (韓国人就学生)：80 分
  - 知人 K：80 分
  - 知人 F：80 分
3. 国際交流センターの日本語教室での授業観察：1 回、80 分
4. M が外出する際の同行調査：4 か所 (1 時間半から半日、うち録音機器携帯 2 回)
  - ・水泳教室
  - ・夕食の買物
  - ・民族博物館における韓国展
  - ・国際交流センターのイベント
5. その他、M と会う際つけていたフィールドノート (電話も含む)
6. M が韓国で通った日本語学院での日本語ノート
7. 地域の日本語教室で書いた作文 25 編 (66 ページ)

8. 2002年2月に国際交流センターのスピーチコンテストに出場した際のMのスピーチ原稿

## 3 分析

### 3-1 理論的枠組み

理論の基礎的枠組みは、B.Norton を使った。Norton は、「アイデンティティと環境の相互作用が言語学習にいかにか影響を及ぼすかを検討した最初の研究者の一人 (Churchill, 2002)」で、その論文 (1995, 2000) では、カナダへ移住した5人の女性の第二言語使用について、日記 (ダイアリー)、インタビューなどをデータとして、その言語使用とアイデンティティとの関係をジェンダー、エスニシティ、階級に言及しながら論じた。

Norton は、今までの第二言語習得研究は、学習者とその社会的環境との関係の概念化に十分に取組みず、学習者を「動機がある」「ない」というような社会から独立した属性を持った個人と捉えてしまっているため、同じ学習者が時には動機が十分で、外交的で自信があったのが、時には動機が弱く、内向的で不安を持っているというような矛盾をうまく説明できなかったと主張した。さらに、学習者が目標言語を使って目標言語話者とインターアクションをする際、そこに社会的な力関係の差があるということも十分に調査してこなかったと述べている。

Norton は、言語学習者が話すということは、ただ情報を交換しているのではなく、常に自分は誰であるか、そして社会とどのように関係しているかということの認識の確認であり、学習者の言語使用はそのような「自分は誰であるか」というアイデンティティと切り離して考えることはできないとしている。

そしてアイデンティティが、多様で、矛盾に満ちており、歴史的時間や社会的空間で変化するということを主張して、調査した5人の移民女性が、どのように英語で話す機会を作り、どのように不公平な力関係に応えたかを示した。

### 3-2 分析過程

エスノグラフィーは、どのようにデータを分析して理論を生成するかに関して、その手順がはっきりと示されている調査法ではないといっている。これはエスノグラフィーという調査法が、いかに未知のフィールドに入り、そこでいかにフィールドノートを書くかに重点が置かれてきた調査法だからである。しかし、先行研究には (たとえば, Creswell, 1998 ; 箕浦, 1999) いくつか共通して言われていることもある。それは以下の手順である。

1. データから、リサーチ・クエスチョンに関係すると思われる事象や繰り返し出現する事象に着目する。「オープンなコーディング」(Emerson, 1998)「カテゴリー化」(箕浦, 1999)
2. そのパターンがどのように関連しているかを考察する。その際、そのパターンに合わない事例も比較検討する。
3. カテゴリーを切っていくようなテーマやアイデアを見いだす。
4. そのテーマやアイデアをもって、データを読み返す。
5. 包括的なテーマ、または理論的関連性を見いだす。

この過程は、1から進み5で終わるというものではなく、データを収集しながら何度か1から5の過程が繰り返され、最終的に「理論が創造される」(Emerson, 1998)。

本研究における分析の手順はおおむね先行研究に沿って行ったが、私が直接見たり聞いたりしたMを切り刻まないようにすることや、コーディングの際などは、データを圧縮し過ぎないように注意して、作業を進めながらも、絶えず元の文字化データやフィールドノートを参照した。また、書くという最終段階に入ってから、解釈のずれがないか、異なる解釈が可能ではないかという作業を何度か行った。

なお、今回の論文は紙面の都合上、分析を終了している5つの場の中から「家庭」「スイミング教室」「Kとの関係」の3つの分析を取り上げる。

### 3-3 家庭

私が1チャンネルと言ったとして、彼が1チャンネルで動く人ではない。逆に彼がチャンネル持っているんですけど、彼のチャンネルと二人ともにチャンネルを持つとしてるから、もう、こっちが1チャンネルをずーと押ししてる、こちらは6チャンネルずーと押ししてる感じだから。V

(I020723)

Mのインタビューの内容の多くが家庭、特に夫の話であり、Mにとって家庭は生活の中心であることをうかがわせた。そこで、夫と義母のインタビューを依頼した。家庭の分析はこれら二人のインタビューはもちろん、結局すべてのデータに家庭のMを分析する解釈のかけらがあり、ほぼすべてのデータが分析対象となった。

この節では、Mがその家庭をどう捉えているかを、M自身の比喩的表現からひも解いていく。また、Mとともにその家庭を構成する夫は「外国人」であるMをどう迎えたのかをみていく。

まず、家庭でのMのイメージをつかんでもらうために、Mの一日を表1に記す。

冒頭にあげたMのインタビューからの引用は、Mが自分と夫との距離をどう捉えているかをM自身が比喩的に表したものである。家庭というテレビに何を映し出すのか、二人が共にリモコンをひとつずつ持ち、Mが1チャンネルを押し、夫はずっと6チャンネルを押ししている。Mは何を表現したかったのだろうか。①ことば、②習慣の二つの側面からみていく。

#### 〈普通の会話——ことば〉

Mは夫に会うまでは、韓国で始めた日本語学習を続けるために日本に留学することを目指してきた。しかし、結婚が決まって留学はとりやめ、「妻」として日本に来ることになった。来日当時の状況をMはこう語っている。

あの学校、日本の学校に行くとか、そういうことはもう結婚する、してんからは、時点からは考えられなかったです。だから、もう、あ、勉強、日本語はこれでやめるんだという感じ、だったです。で、今までの私が習った日本語を生かして、この生活の、日本の生活の中であの、ちゃんとやればいいんだという感覚で、来たんです。

(I020315)

Mは日本での生活を始めるにあたり、韓国での日本語学習で、「2年間、ほんとにそういう基礎をちゃんとやってきた」(I020308)から、日本語の勉強はもう終了し、あとはそれを生活の中に生かして、ちゃんとやればいいと考えていた。以下にあげる周りの人の話のように、来日当時のMの日本語はコミュニケーションがとれないなどの問題は全くなかったようだ。

「初めから、上手ですよ」

(I020614：義母)

「もともとかなりしゃべるほうに関してはかなりよかったですね」

(I020628：国際センターの日本語教室の講師)

しかし、冒頭にあげた夫の押ししている6チャンネルでは、この結婚をどう捉えていたのだろうか。それは以下のことばに集約される。夫がインタビューの中で何度か口にしている「普通の」である。夫はこう話している。

関西でいうNHKか教育テレビ以外は見るなど。言葉は意味が分かんなくなっていていいと、とりあえずそれをききなさい、と。で、その次、同じくNHKか教育テレビでやっている漫画を見なさいと。幼児番組見なさいと。で、その次に、あの日本の小学校の1年生2年生ぐらいまでの教科書を全部買ってきましたね。

で、それでどうすればいいかって言えば、あの、たとえば、NHKにあの、しゃべり方のそういう教室とかセミナーとかあるんですよ、ああいうところ行ってもいいですよ。正しく、きちっと、こう口の開き方とか、きちっとどこで切るとか、

表1 Mの一日

午前	夫を送り出す 義母が起きてくるまで洗濯などをする 新聞を読む
義母が起床	義母の世話 →お母さんはお店をしている。朝は遅い。 午前中はお母さんの世話をしたり、店のおしぼりを用意したりすることもある。 (I020226) 義母と共に遅い朝食、朝食後、義母は店へ行く 朝食の後片付け
午後	日本語教室や水泳教室へ行く日は出かける 6時30分には「きっかり」(I020315) 夫が帰宅
夜	夫のお風呂の後、7時半～8時に夕食 片付け、勉強

あの朗読者になれとは思ってないですけども、ちゃんと日本語正しく伝える勉強してくれたらいいなど。

最近感ずるのはあの、国内の地名を覚えませんよね。全く知らないんですね。だから**普通の会話**ができない。あの、世間の方と。この間、青森行ったんだけど。少し寒かったんですよなんつっても、青森ってどこにあるかわかんないわけで。だから今何かあの、都道府県覚えて、じゃ、その中の、あの都道府県庁はどこにあるんだとか、そういうふうな基礎的なことはちゃんと覚えとかなきゃだめだからって感じしますよね。

(I020803)

国語が好きだったとインタビューの中で自身を語った夫の考える日本語教育は、日本人の子供がたどる道のりをたどり、NHKを標準モデルとする日本語で、世間の人と正しい「**普通の会話**」をすることである。ここでは、夫は「**普通の**」日本語を完璧に話せる者であり、妻は話せないという明らかな上下関係が生じ、正しい日本語を話す夫が、およそ到達できないゴールをMに示すという構図になる。

Mはそれをどう捉えていたのだろうか。再びMの話に戻る。

主人は**わたしが外国人**だから、あま、甘やかしちゃいけないと思ってる感じをする人です。うん、だからちょっとでも、違ったらも、すごく叱ってから、正しい日本語をまだ教えてくれて、それをまだわたしが声に出して、いっしょに、なんか同じようにしなければ気が済まない性格です、彼は。

(I020315)

Mは自分が「**外国人**」だから、誤りがあれば訂正され、それを一緒に言われると話している。来日して約10か月の作文にこう書いている。

日本で住むようになってから、私は日本語で話すことが**怖くなった**。(中略) **外国**で暮らし、その国のことばを使うということがどれくらい大変なことか、日本語が上手になればなるほど**心は重くなる**。

(S010730)

Mは韓国で日本語を学習している間、何度か日本を訪れている。東京に住む弟のところへ行ったり、福岡を旅行したこともあった。インタビューでその頃の話になった時、「ひとつひとつ覚えていくのが楽しかった」「せっかく覚えた日本語だから何とか生かसान

くちゃと思って、もううきうきして」(I020308)と言っている。この頃は「外国にること」「外国語」が楽しく、心も浮き立っている。しかし実際に日本に住むようになり、厳しく直されるようになって、楽しかった「外国語」と、夫の設定したゴールはあまりにかけ離れ、「怖くなった」と言うほどまでにMの心情は変化している。

〈普通の日本人——習慣〉

夫のインタビュー

**Mの夫**：あのごく普通の日本人の考え方なんで、嫁に来たんだから、この家の中に入ってくれと。で、いやなら帰れと。そういう考え方ですから。  
**Qvi**：じゃ、いずれは帰化してほしいというふう  
 に。  
**Mの夫**：欲しいんじゃないで、しなさいと。いやだったら帰ってくださいと、そういう考え方ですから。嫁としてもらったんだから、この家に骨埋めると。

(I020803)

足はこういうふうに座りなさい。食事する前はこうしなさい、ご先祖様にはこうしようとか、(中略)基本的に箸の持ち方から、お椀の持ち方から、全部違いますよね。そこら辺がしゃくに障りますからね、ぼくは。

(I020803)

これに対して、Mはこう話している。

家で主人に日頃すごくしつけを、だから、最初は、習慣の違いがあって、主人に、私がここまで直すから、あなたもここまでちょっと来てっていう、だから日本の習慣がここで韓国の習慣がここだから、主人は(私に)ここまでぎゅっと来る、来てほしいわけです、日本の習慣に。でも、私はお互いに違う国だから、こうしよう。(笑い)昔はね。だから、もう、それは主人は絶対動けない(動かない)わけです。ここで。動か、俺が。お前、日本に来てるから、日本人で生きていかなきゃならないと、日本にいる間は。

(I020723)

夫がインタビューで「嫁としてもらった」「家の中に入る」と表現しているように、女性が「嫁」というカテゴリに入った場合、そこには基本的に選択権や人格はない。これはジェンダーの問題でもあるが、夫の理論では、「主人」が1チャンネルといったら、箸も持ち方から、お椀の持ち方まで、家庭は1チャンネルしかないのだ。「日本人で生きていかなきゃならない」のだから、Mの言う「お互いに違う国だからこうしましょう」という理論は通らない。

Norton (2000) は言語使用と「力」の関係に言及し、第二言語学習者は不公平に構造化された世界に関連して理解されなければならないと主張している。

Norton は「力」を、言語・教育・友情というようなシンボリックリソースと、資本・不動産・お金というようなマテリアルリソースを通しての個人、組織、コミュニティにおける社会的に作られたマイクロなレベルの関係に働くものとして使っている。

Mの例で言えば、Mの夫は日本語というシンボリックリソースと、彼が常に社会的に中央に出る家の「主人」であって、働いてお金を持ってくるというマテリアルリソースの両方をコントロールできる立場にあり、「日本語を普通に話せない」そして「嫁」であるMにはその両方が自由にならない。従ってMは家庭において夫と話すたびに、「主流から排斥された」(Norton, 2000) 自分を意識させられることになる。先に引用した「心が重くなる」というMの作文からもそれは裏付けられる。

しかし、ここでもう一度夫の側に立てば、「厳しくするのは理由がある、本当にMのことを考えているのは自分である」と言うだろう。事実、スイミング教室への入会、夫が加入している宗教の会に誰かを紹介してくれるように依頼し、Mが知人Fを知ったことなどMがネットワークを広げることに夫は貢献している。そしてそのネットワークの広がりの中で、Mが外で困らないように、日本人と同じように日本語を使わなければならないのだという主張は納得できるように思われる。実際にインタビューの中で、夫はどのように話している。

**M の夫**：なるべく、あのしゃべる時は、方言を言わないようにしましたね。

**Q**：ご主人がですね。

**M の夫**：ええ。

**Q**：ああ、あ、そうですか。

**M の夫**：あの、あとで困るんでね。

**Q**：ああ

**M の夫**：(中略)やはりあの彼女とぼくは年代相当違いますんでね。だから私がたとえば、×××いなくなって、一人でやっぱりやっていけるためには、正しくやっとかないと。困るなっと思っ  
(×××：不明瞭)

(I020803)

この話は非常に説得力がある。妻への愛情であることは否定しない。しかし、古川・山田(1996)は日本語を使えるようになることが、生活地域のコミュニティに十分に参加できるようになることだという論理を批判して、以下のように述べている。

地域社会において、そこでの「十分な参加」を誰の行動をモデルとして設定するのか、誰をフルメンバーとして想定するのかは非常に難しいことです。ところが、そこで「普通の日本人」、「一般的な日本人」という不思議な概念を持ち出してこれを規範とするということが実は頻繁になされているのではないかと思うのです。

もし M が日本人であり、日本人同士の結婚であったなら、たとえ M がどんな日本語を使ったとしても、夫は少なくとも「普通の会話」を M に求めることはないだろう。逆に M が韓国人である限り、M がどんなに日本語が上手になったとしても、またどんなに日本の習慣に通じたとしても、夫の設定したゴールテープを M が切ることはないのではないか。なぜなら M が家庭で、あるいは日本社会で、「外国人」であることは変わらないからである。

家庭の中で 1 チャンネルを押し続けた M。結局、彼女はあきらめたのだろうか。インタビューや雑談などで M が夫のことを私に話した際、私は「私にはできない」と言ったことがあった。それを M は覚えて

いたのかどうか、インタビューの中で、こう言ったのだ。

普通の人も、私だったらできませんよとか、日本に来て、こういう環境の中で、**私も、私だったら**できない、**私も私だったら**本当にできないんです。

**本当に私だったら**、私の**現実の私**だったら、こういうのはできません。もう既に、とっくに韓国に帰ってます。

(I020723)

この時、録音したテープの様子では、M は興奮ぎみに話している。そして何度も「私」ということばを使い、「**私も私だったら**」を 2 度繰り返している。「日本に来て、こういう環境の中の私」と、「現実の私」との間でせめぎ合いがあったのだろう。M は、家庭の中での自分は「**本当の私**」「**現実の私**」ではないと思うことによって、家庭での M を成り立たせているのではないだろうか。

では、M 自身が考える「**本当の私**」とはどんな M なのか、それを「日本の環境」の中でどう実現できるのか。M が以下のように話していたことがあった。

彼(夫)はある面では、今こういう先生たちとかいろんな人たち、自分(夫)が見えない人にすごく救われている。それは、みんなが私を支えてくれるから、私が家に帰ってそういうこと(家庭の私)ができるから、彼は本当にみんなに感謝しなければならぬと、たまに思うんです。

(I020723)

私の周りの人はいい人ばかり。主人以外は。

(F020706)

M は自分が家庭でやれるのは、いろいろな人が自分を支えてくれているからと話している。これは家庭以外に「家庭の私」ではないさまざまな「**本当の私**」を受け入れてくれる場があるからだといえるのではないだろうか。次節からそれを順にみていくことにする。

### 3-4 スイミング教室

私が泳ぐとみなが見てるんです。感じるんですね。顔をあげると、みんな顔を横むく。そのうち、「どうやるの?」と聞いてきた。

(F020625)

家庭では1チャンネルを押すMと、6チャンネルを押す夫がいた。そしてそこには、二つのリソースを持つ夫と、持たないMという力関係が存在していた。Mは、家庭の私は「本当の私」ではないと思うことによって、家庭の私を成り立たせていた。この節ではMがその家庭を離れ、スイミング教室というコミュニティにおいて、いかに自らのアイデンティティを変容させながら、「本当の私」を獲得する闘争を繰り返しているか、またそれができた理由は何なのかを見ることにする。

Mは二つ離れた駅のスポーツクラブに所属している。韓国で水泳を習い、以来ずっとプールに通っていた。私が同行したスイミング教室で、クロールからバタフライや飛び込みまで見学したが、かなりの上級者だと思われた。日本では、来日して何か月か経って、夫の勧めでスポーツクラブの会員になった。会員になればいつ施設を使ってもいいのだが、クラブの中でいろいろなスポーツ教室が開かれており、Mは週1回のスイミング教室に所属している。このスイミング教室がある曜日は必ず参加し、それ以外でも来ることがある。1年ほど続けたが、韓国人の就学生Pを家に下宿させることになり、半年ほど中断し、2002年の6月に再開した。再開後の2週間目に同行調査を行った。

そもそも、スイミング教室に興味を持ったのは、Mと私が一緒にいる場面で、偶然会ったスイミング教室の知人を見た時の彼女の明るい表情がきっかけだった。

公園から中に入る途中、3人(M, P, 調査者)で並んで歩いていると、後ろから自転車に乗ったおばさんが3人を追いこしていった。Mが「あ、スイミングのおばさん」と声をあげた。声が明るい。前を見ると中年のおばさんが、自転車を漕いでぐんぐん遠ざかっていった。Mが前に話してくれた週1回の、スイミングで同じグループにいる

のだろう。時々スイミングが終わって外でみかける時があるそうだ。そんな時は声を掛け合うらしい。

(F020320)

それはその時まで、私が見ることのなかったMだった。うれしそうだった。なぜだろうと思った。初めて会った時、彼女はこんなことを言っていた。

私は国ではおもしろい人だった。でも、こちらでは冗談を言えない。主人には言えない。だから、スイミング教室の休み時間におばさんに話をした。吸血鬼が全部歯がなくなったらどうしますか? みんなは分からないと言った。私はストローで鼻からずーと吸うんですよと言った。みんなえー、うなーと言って笑った。

(F020226)

ここで、注目したいのは、Mは自分のことを「私は国ではおもしろい人だった」と過去形で言っていることである。そして「こちらでは冗談を言えない。主人には言えない」と続けている。これは日本での今の自分は、「おもしろくない人」になったとMが捉えているということを示しており、また家庭では「冗談を言えないM」が、スイミング教室では「冗談を言うM」になるという多様なアイデンティティの側面を表しているのではないかと思われた。

そこで、プールでの同行調査を依頼した。録音機をつけてもらうことは不可能だったので、ノートとペンを持ち込み、プールから3メートルくらい離れたプールサイドで観察した。流れている音楽や、水の音などで人の声はまったく聞こえなかった。

時間が来てプールに徐々に人が集まってきた。Mは準備体操をしたり、ウォーミングアップのため何回かプールを往復しながら、2,3人の人に自分から話しかけたり、話しかけられたりしていた。年配の女性とは5分以上話していた。何度目かにプールの端に戻ってきた時、ピンクの水泳帽子をかぶったMと同年代の女性(以下R)と話しはじめた。

Rの手をとって、Mがもう片方の手で水を飛ばす。Rにかかって笑う。50メートルで戻るとプー

ルの端で、戻ってきた R とまた話す。M が何か言  
うと、プールの縁に腰をかけた R が M に水を少し  
かけた。M は笑って出る。

(F020625)

インストラクターが現れ、教室が始まった。メンバ  
ーは 15 人ぐらいで、インストラクターの指示に従い、  
プールの端に並び、順に決まった型で泳いでいく。そ  
の間は誰もあまり話さない。教室が終わって帰る時、

入口の辺りでインストラクターの先生が R と話し  
ていた。二人は私たち (M と私) を見て話を止めた  
が、M は「なに？彼の話」と言って笑った。R  
は否定していたが、二人 (R とインストラクター)  
とも笑っている。

(F020625)

プールでの M は終始打ち解けて楽しそうだった。  
いろいろな人とよく話していた。R とのやりとりなど  
を見てみると、きっと冗談も出るだろうと思われた。  
私はここでの M の変化をプールから上がって私に話  
してくれた以下の M の話から理解することができた。

はじめは来てただ泳いでいた。私は仲間はずれだ  
った。私は気にしないから。話してもわからない  
かもと思って話しかけてこなかった。泳いでいる  
うち、インストラクターが「きれいに泳ぐね」と  
言って、こういうのがあるからと言って、今のグ  
ループに入った。初めはなかなか前に行かせても  
らえない。泳ぐ順番が決まっていて、新人は後ろ  
の方になるということらしい。でも、私が泳ぐと  
みなが見てるんです。感じるんですね。顔をあげ  
ると、みんな顔を横むく。そのうち、「どうやる  
の？」と聞いてきた。

(F020625)

M は初めは誰も話しかけてこないし、泳ぐ順番も  
前へ行けないことで仲間はずれだったと感じていた。  
「話してもわからないかもと思って」と M が言っ  
ているように、はじめはここでも「排斥されていた」の  
かもしれない。しかし、M には 10 年近く泳いでいる  
水泳のきれいなフォームがあった。それをインストラ  
クターが「きれいに泳ぐね」と認めたことで、スイミ

ング教室というコミュニティの中の力関係に転換が起  
きた。M は居場所を見つけ、「話しかけてもわからな  
い人」から「M」として認められることになった。冗  
談が言えるまでになり、「おもしろい人」だった自分  
を取り戻した。

調査した日の M は常に 1 番目か 2 番目で泳いでい  
たし、教室が終わった時、隣の人に「手を水に入れる  
角度について手を添えて説明している様子」  
(F020625) が見られた。

10 月のフォローアップインタビューで M はスイミ  
ング教室について以下のように話している。

M: みんな私のことを分かってくれていると思って  
落ち着く。かなりの存在感を感じるんですね。

Q: 自分の？

M: 自分、自信をまた戻して。(I021004)

### 3-5 知人K

これを言って相手に怒られるか、これを言って間  
違えたら、相手が私をばかにするんじゃないかと  
いう思いはないから、もう気楽にしゃべれる。

(I020705)

この節では M と K が協同してお互いを認め合う空  
間を創り出す関係をみていく。家庭では初めからリソ  
ースを持つ者と持たない者という力関係が存在してい  
た。またスイミング教室においても、初めは M は列  
の一番後ろに並んでいた。しかし、ここには、そのよ  
うな力関係は存在せず、日本語が話せないこともマイ  
ナスの評価ではなく、逆に韓国語を学習している K  
と第二言語学習のむずかしさを共有できる場があった。  
また、K が M の韓国での家族や歴史を知っているこ  
とにより、K を「兄」と位置づけ、安心して日本語を  
話すことができた。またそれは K の変化とも絡み合  
ってもたらされたものだということを主張する。

K のインタビューは M も同席して、M の家に近い  
静かな喫茶店で行った。私が喫茶店に着いた時、す  
でに M はカウンターから一番遠い 4 人がけの席の壁側  
に座っていた。私が席に着いてしばらくして K が現  
れ、M が私を K に紹介した。一通りのあいさつをし

てから、調査の概要と M のインタビューをとった際に、何度か K の名前が上がったので、今回のインタビューをお願いしたのだといういきさつを説明した。

一番古くから M を知っている K に M の日本語や日本での生活について話してもらうことと、実際に M と K のインターアクションを目の前で見るという二つの目的でインタビューを始めた。

ここでの M を知るために、データから知り得た K という人物をまず明らかにしなければならないと思う。K は 4 年前に韓国人の知人に会いに韓国へ出かけた。その際に、その知人と一緒に空港で K を出迎えてくれたのが知人の親戚である M だった。その知人はあまり日本語が「堪能ではない (I020705 : K の発話)」し、K も韓国語は「片言ぐらいしかわからない (I020705 : K の発話)」ため、M が通訳をしたり、K の旅行の便宜をはかったりしたというのが最初の出会である。

K が初めて韓国へ行ったのは、それから遡ること 3 年、今から 7 年前であった。先輩の誘いで初めて韓国を訪れた。それからは毎年のように行っているという。インタビューで「では、韓国はずっとお好きな国なんですかね。」という問いに以下のように答えている。

いや、最初は恥ずかしながら、いろいろな人に教えてもらったのがちょっと変な先入観というか、私、正直言って差別していましたね。初めて行った時に、私は全然、アンニョンハセヨ（こんにちは）、カムサハムニダ（ありがとう）も知らないから、カタカナで書いてもらって先輩に。（中略）ああ、近くてほんとにこんな近い国でカタカナみたい、記号みたい、なんでわからないんだということ思いましたね。これは、私思ってたのはもう全部間違ってたなあ、逆に私の父親とか、もうおじいさんの時代にほんとに悪いことをしたなという思いがあって。

(I020705)

K は韓国は好きな国かという私の問いに、その答えではなく、韓国に対する自身の心の変化を話している。7 年前に行った韓国で何があったのか詳しくはわからない。しかし、それまで韓国を差別していた K が韓国を訪れたことによって、大きく考えが変わったこと

は、このインタビューの「全部間違ってたなあ」ということばからもわかる。帰国後、K は在住する市が主催するハングル読み書き教室へ半年ほど通っており、それから深く入るようになったと話し、「覚えたらなかなか楽しいことばですね (I020705)」と付け加えている。

K が M と出会った旅行を終えて帰国してからも、K が韓国人の知人 (M の親戚) と連絡するため、M が電話で通訳することが何回かあったそうだ。

やがて M は日本人と結婚し、全くの偶然で K が夫と同じ市に住んでいたことから、K と再会することになった。これは M にとっては心強かったのではないかと思われる。M は K へのインタビューの際、K についてこのように話している。

日本人でも話す人によって自信がいたり、自信をなくしたりする場合があります。オッパの場合は、すごく自信がつくんです。話せば話すほど日本語で話したくなる。

(I020705)

この発話は M と K の関係における M をみごとに表している。ここでの M を以下の 2 点で説明したい。①ひとつは M は K と話すとき自信がつくと考えていること、②もうひとつは K のことを「**오빠** オッパ」(兄) と位置づけていることである。

#### 〈自信——話せば話すほど話したくなる〉

M は K と話すとき自信がつく、話せば話すほど話したくなると、言っている。そして、相手によっては自信をなくしたりする場合がありますという。Canale (1983) はコミュニケーション能力には、文法能力、社会言語能力、談話能力、ストラテジー能力の四つが含まれるとしたが、では、はたしてこれらの能力がすべてあれば、第二言語話者は目標言語話者とのコミュニケーションを円滑に行うことができるのだろうか。答えは否である。青木 (1997) は対話を進めるための能力について、インタビューでこう答えている。

あの人とは話しやすいけれど、この人とは話しにくいということはありますよね。それは、やはり相手が自分の力が生きるようにしてくれるかどうか、ということなんだろうと思います。(中略) 学習者だけが努力しても 駄目で、やはり周りにいい環境がなければ能力というのは生かせないし育たない。

M にとって K との関係は、能力を生かすことの出きる関係であるといえるだろう。そして、もう一つ大切なのは、コミュニケーション能力といった場合には、学習者にはすでに話す場が保証されているという前提があることである。しかし、もし第二言語話者が社会的に周辺に置かれている場合、まず「ばかにされることなく」話す場を確保するための闘争が必要なのである。そして、これらのことはこれまでの日本語教育ではあまり語られてこなかったことである。

K のインタビュー中に以下のような M と K のやりとりがあった。

**M1**：絶対あの韓国語も日本語も大事なものは、頭で自分の母国語で考えてしゃべる時には

**K1**：考えてから、わたしもそう、それしかできないから、わたしもそれしかできないから

**M2**：おかしくなる。表現、表現が全然日本語が要求する表現とは全然違う。

**K2**：そう、自分で一回考えてね、それくらいしか私もしゃべれないわけですよ。

**M3**：その代表的なのは、本を読むというんじゃないですか。で、韓国語では本を見る。だから、あ、本を見るを韓国語で「 책을 보다 」(見る)じゃない。で、「 책을 보다 」(見る)あ、「 책을 보다 」(見る)と考えると、日本語で本を見るとゆったら、全然違うじゃないですか。薬も食べるというんです、ね。

**K3**：そうですね、「 약을 먹다 」(食べる)というからね。その表現の違いはだいぶありますね。

**M4**：ただ、それを韓国語で考えて、

**K4**：ゆうたら失敗やね。

**M5**：ゆうたら失敗です。

**K5**：薬は飲むやからね。

**M6**：帰って、今度は韓国に私が帰った時に

**K6**：ミックスして、間違って

**M7**：あの、薬を食べたらっていうのに、私は韓国語で、あ、薬飲んだらって言ったら、なんで

薬を飲むのとみんなから言われる。

**K7**：「 약을 마셔요 」(薬を飲む)といわなあかんから

**M8**：(笑い)

(I020705)

このやりとりは初めに M が韓国語と日本語の表現の違いという話題を提供し (M1)、その例をあげ (M3)、今度は韓国に帰った時の例で話を展開している (M6)。K の一言で会話が終わっているが、終始 M が主導権を持ち、会話の主体となっている。

しかも話題は、第二言語の表現の違い、むずかしさ、むしろ失敗談であるにもかかわらず、会話は流れるように、その失敗を共有するような楽しさで進んでいる。K のインタビューの席で、この会話の最後に M が笑った時、実は私は笑うことができなかった。最後のことばの意味が全くわからなかったからだ。フォローアップインタビューで M にこのことを聞くと M はこう話してくれた。K は「日本語では薬を飲むといわなあかんから」と言いたかった。だから日本語で「薬を飲む」と言えばいいところを、そこだけ韓国語を使って「 약을 마셔요 」(薬を飲む)と言ったので、笑ったということだった。この笑いは韓国語と日本語の両方を知らなければ、笑えないものだったのだ。M と K の間では、日本語が話せないことは下位に位置づけられるのではなく、日本語の間違いや失敗が共通の経験として共有される。このような関係はインタビューの K の話からも裏付けられる。

**Q**：日本語を教えたとか、そういうことは？

**K**：あ、それはもし聞かれたらね。あのオッパこういうことば何ですか、聞かれたら、その、こういうこと違うかなという話はね。(中略) もし、聞かれたらその時に自分が、あのわかる範囲で説明してあげるぐらいの話で

**Q**：聞かれなければ？

**K**：もう、何にも。逆に、まずそんなのはなしで普通の、日本人と同じような会話してるだけで、私はその時にもう韓国の方っていうのは、ほとんど頭に意識ないですからね。

(I020705)

〈 〆叫 オッパ 〉

そして、もうひとつ M が K のことを「 〆叫 オッパ 〉(兄)と呼んでいることであるが、M は以下のように言っている。

実家の人のお兄さんのような気がして、遠いところにいるから。あ、私のお兄さんもこの近くにいるっていう気持ちがある。

(I020705)

K もこう述べている。

やっぱりこっちに来て生活する、すんの寂しい、大変やろなと思う。そのお互いの価値観が御主人とちょっと違うところあるからね、で、彼女がむりやり合わせていると思いますんでね。

(I020705)

頻繁に会うことはなかったが、K は M の家に招かれ、夫や義母と食事をしたこともあり、家庭のことも知っていた。日本という環境で暮らす M にとって、M が K のことを「兄」と位置づけている理由は、K は韓国に詳しく、韓国での自分、そして今の日本での自分の両方を知っており、M の韓国と日本をつなぐことのできる唯一の日本人だったことである。そして K にとっても M と話すことに、ある自分の居場所を見つけているといえるのではないだろうか。

4 まとめ

本研究では、学習者が日本という社会の中で「日本語を使って生活する」とはどんなことなのか、またそれは学習者にとってどんな意味を持つのかというリサーチ・クエッションをたてて、フィールドに入った。そして、M のネットワークを調査しているうちに、M が今の自分を過去の自分と対比させていることに気づいた。それは、スイミング教室の分析でも引用したこの一言がきっかけだった。

私は国ではおもしろい人だった。でも、こちらでは冗談を言えない。主人には言えない。

(F020226)

その日の打ち合わせで M と話した私は、M が「冗談を言えない」のは、文法がよくわからないからではなく、語彙を知らないからでもないことはわかっていて。その証拠に、スイミング教室では冗談を言って皆を笑わせる M がいた。このことは M の日本語能力の問題だけでは説明できず、家庭における夫とのインターアクションで「おもしろい人だった」自分を表現することができないと考えれば説明がついた。そしてこれを説明するためには、「冗談を言う M」「冗談を言えない M」あるいは「冗談を言わない M」という多様な M を、一人の M の中に認めなければならない。

アイデンティティは「自分は誰か」と問うものである。Erikson (1977) は、子供はしつけや学校教育によって、その文化特有の基本的諸様態をひとつひとつ学んでいき、その文化の同一性を引き継いでいくと述べた。そしてエリクソン以来、「自分は〇〇である」というようなアイデンティティが、自己の内でも統合化されていくとする一元的アイデンティティ観が、広く受け入れられてきた。しかし、国家から国家、あるいは文化から文化への人の移動が日常的に行われる現代では、このようなアイデンティティ観を受け入れることは難しくなっている。保坂 (2000) が「価値が多様化したポストモダンといわれる現代においては、アイデンティティが固定した静的なものであるというよりもむしろ、文脈に応じてそのつど選択されるという視点が採用されるようになった」と述べているように、アイデンティティは再検討されているといえるだろう。

本研究はネットワーク研究という視点で、保坂 (2000) の言うアイデンティティが選択される「文脈」に、ネットワークという概念を重ね合わせたことで、M という一人の人間が、さまざまな空間でアイデンティティを変容させているのを見てきた。また、それは葛藤を伴ったり、他者の期待とせめぎあったりすることもあった。

では、なぜ M はアイデンティティをその文脈に応じて変容させたのか。

本研究では、学習者と目標言語話者との不公平な力関係、また個人のアイデンティティが多様で、矛盾に満ちており、時間や空間で変化するという Norton (1995, 2000) の理論を基礎的枠組みとして使ってきた。Norton は 5 人の調査協力者が、家庭や職場という空間における「話す権利の獲得」(Norton, 2000) のために、いかに「闘争」(Norton, 2000) を繰り広げながらアイデンティティを構築したかのストーリーを書いた。

本研究では、これを踏まえながら、しかし、Norton でははっきりと語られていなかった部分、つまり M は「話す権利の獲得」のみならず、「こうありたい自分」を獲得するために、ネットワークという「文脈」でアイデンティティを変容させたのではないかと主張できると考える。

小沢 (2002) は、青年心理学の研究において、「居場所」という概念を提示して、以下のように述べている。

個人は、生活の中でいくつかの「居場所」をもつ。そして、それぞれの居場所の「居心地」を実感する。その実感の基準となっているものは、個人の「私はこうありたい」という思いであると考えられる。そして、生活の中で、それぞれの居場所について、個人は獲得と喪失と葛藤を繰り返す。

M は日本人の配偶者として日本に住むことになり、韓国での自分の「居場所」は失うことになった。しかし、日本で新たな「居場所」となるはずの家庭では、夫との関係でリソースを持つものと持たないものとの上下関係があり、「これを言って間違えたら、相手が私をばかにするんじゃないか」という思い (I020705) から、「こうありたい自分」を表現することはできなかった。家庭で M が話すということは、「主流から排斥」されることであり、そこに「居場所」を見つけることから対極にあった。

やがて M は家庭の外にネットワークを広げることになる。M のネットワーク形成のきっかけは、スイミング教室、知人 F との関係など、夫の貢献によることも大きい。その中で、「居場所」を作っていたのは、ほかならぬ M 自身であった。スイミング教

室では、「話しかけてもわからない人」と自分を捉えていた M が、その水泳能力で、コミュニティの上下関係に転換をもたらし、「国ではおもしろい人だった自分」を再構築し、冗談を言うことができた。K との関係では、K との相互作用で、日本語の母語話者でないことが下位に位置されることではない空間を作り、さらに韓国語と日本語の両言語を共有する空間を作った。

このように、M のネットワーク形成は、「こうありたい自分」を実現するための「闘争」であった。そして、M は矛盾や葛藤を抱えながらも、自分の居場所を獲得するために、ネットワーク上のさまざまな文脈との相互作用で、多様なアイデンティティを構築した。

自分が誰であるか、つまりアイデンティティは、自分の内側にあるものではなく、社会における他者との関係や、文脈との相互作用の中で、自分が誰であるかを選択し、獲得していくものなのである。そしてその過程では、「話す」ということが自分が誰であるかを示すことなのであった。

本研究では、リサーチ・クエスションであった第二言語を使って生活するというもののあるかたちを M の断面を描くことによって、示すことができたと考える。つまり、第二言語を使って生活することは、文法的に間違えないように話す、あるいは目標言語社会のルールを覚えて逸脱しないということではなく、自分が参加したいコミュニティや個人との関係の中で、「こうありたい自分」のアイデンティティを実現していくことであった。

## 注

- i いわゆる難民条約に該当する難民、定住インドシナ難民、日系 2 世 3 世等の定住者
- ii エスノグラフィーには、1) フィールドワークの結果をまとめた「民族誌」という意味と、2) フィールドワークという調査の方法あるいはその調査のプロセスという意味があり、現在は両方の意味で使われている。
- iii データからの引用は本文で以下のように示す。I: インタビュー、F: フィールドノート、S: 作文、D: 同行調査 数字は月日、たとえば、(F020115) は 2002 年 1 月 15 日のフィールドノートからの引用であることを

示す。

- iv What they make and use (Creswell, 1998)
- v M のインタビューの引用は、できるだけ M の発言を忠実に文字化したもので、修正は加えていない。
- vi Q : 調査者。

## 参考文献

- 青木直子. (1997). 言語学フロンティアインタビュー31. 言語, 7, 118-122.
- Canale, M. (1983). Communicative competence to communicative language pedagogy. Richards, J. & Schmidt, R. (Eds.) *Language and communication* (pp.2-25) London: Longman.
- Churchill, E. (2002). Interview with Bonny Norton. *The language teacher*, 26-6. : JALT.
- Creswell, J.W. (1998). *Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing among Five Traditions*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Emerson, R., Fretz, R., & Shaw, L. (1998). 方法としてのフィールドノート (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋, 訳). 東京: 新曜社. (Emerson, R., Fretz, R., & Shaw, L. (1995). *Writing Ethnographic Field notes*. Chicago: University of Chicago Press.)
- Erikson, E.H. (1977). 幼児期と社会 (仁科弥生訳). 東京: みすず書房. (Erikson, E.H. (1963). *Childhood and society*. New York: Norton.)
- 古川ちかし・山田泉. (1996). 地域における日本語学習支援の側面. *日本語学*, 15, 24-34.
- 浜田麻里. (2000). 日本語学習者の学習環境. 第3回阪大日本語学研究会.
- 保坂裕子. (2000). 多声的時空間におけるアイデンティティ構築: アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 46, 425-437.
- Kramsch, C. (2002). *Language Acquisition and language Socialization : Ecological Perspectives*. London : Continuum.
- Lantolf, J.P., & Pavlenko, A. (2001). Second Language Activity theory: understanding second language learners as people. In Breen, M.P. *Learner contributions to language learning: new directions in research*. (pp.141-158) .London: Longman.
- Maanen, J.V. (1999). フィールドワークの物語: エスノグラフィーの文章作法 (森川渉, 訳). 東京: 現代書館. (Maanen, J.V. (1988). *Tales of the Field : On Writing Ethnography*. Chicago: University of Chicago Press.)
- 箕浦康子. (1999). フィールドワークの技法と実際. 京都: ミネルヴァ書房.
- ネウストブニー, J.V. (1997). 日本語教育とネットワークの考え方. 国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究: 最終報告書, 181-195.
- 日本教育学会. (1977). 国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究: 最終報告書, 平成8年度文化庁.
- Norton.B. (1995). Social Identity, Investment, and Language Learning. *TESOL Quarterly* 29, 9-31.
- Norton.B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. London: Longman.
- 小沢一仁. (2002). アイデンティティとダイナミズム. 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 32-33.
- Pavlenko, A., & Lantolf, J.P. (2000). Second Language Learning as Participation and the (re) construction of selves. In Lantolf, J.P. (Eds.) *Socio cultural Theory and Second Language Learning*. ( pp.155-177 ) . Oxford: Oxford University Press.
- Pavlenko, A., & Piller, I. (2001). New direction in the study of multilingualism, second language learning, and gender. In *Multilingualism, second language learning, and gender*. (pp.17-52) . New York: Mouton de Gruyter.
- 田中望・斉藤里美. (1993). 日本語教育の理論と実際: 学習支援システムの開発. 東京: 大修館書店.
- Toohy, K. (2000). *Leaning English at School: Identity, Social Relations and Classroom Practice*. Aberystwyth: Multilingual Matters.
- 内海由美子・吉野文. (1999). 短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析: ネットワークの視点から. 千葉大学留学生センター紀要, 5, 30-55.

(2003.6.28 受稿, 2003.10.27 受理)